

(論文)

小布施と松代 地域おこしの違い¹

岩村 沢也 清水 正道
山口 光治 米村 美奈

キーワード

小布施 松代 内発的発展論 地域内住民自治 修景

はじめに

近年、日本の各地では「地域おこし」が盛んである。基礎自治体である市町村は、国が大きな財政赤字を抱えていることから地方交付税や補助金には頼ることはできず、中間自治体である都道府県もそのほとんどに大きな債務がある。市町村も同様である。80年代までの国が指導・率先してきた全国的な国作りから、バブル崩壊以降は、基礎自治体、あるいはその中のさらに小さな単位である集落や小さな集団、個人の集まりによる「地域作り」が、これからも人々が暮らし、生業を成り立たせるために必須になってきている。自分たちの生活は自分たちで守れということだ。

一方、国による全国一律の生活基盤を作る時代から、一律では対応できない地域の実情に合わせた、地域の整備・発展が必要な時代を迎えている。道路・上下水道・鉄道・学校・公民館・図書館・体育館・市町村民会館・農道と圃場整備・河川治水対策というライフラインとモノ中心の基盤整備事業、また「最低限」の公による文化施設の建設という時代から、イベント、文化、景観、観光、福祉と健康というソフトのマネージメントがますます地域経営において重要な時代になってきている。これらは全国一律のフォーマットで作れるものではなく、また一律の基準で計れるものでもない。まさに「地域独自」のアイデア、基準、審美眼、楽しみ方、幸せの形が、住民からもまた外からやってくる観光客・企業人からも求められている。

社会学の社会変動論の分野では、80年代前半までの、国家を発展の単位にし、また西洋をモデルにした「近代化論」から、80年代、世界資本主義の動きを全体としてとらえる「従属論」あるいは「世界システム論」へ関心が移り、さらに、国家よりも小さい単位で、西洋の経験をモデルにせずに、地域ごとに発展の戦略を考えていく「内発的発展論」が80年代末以降注目されるようになった。社会学の分野でのその主唱者は鶴見和子であった²。岩村は鶴見の内発的発展論を10の要素に分類し、各地域の発展は10の内発性から考えていくことを提案した。その10の視点とは ①基本的人間欲求の充足 ②不条理の削減 ③地域住民主体の

いわむら たくや しみず まさみち : 淑徳大学 国際コミュニケーション学部 人間環境学科 教授
やまぐち こうじ よねむら みな : 淑徳大学 国際コミュニケーション学部 人間環境学科 准教授

運動であること ④運動が外部の資源を当てにしていないこと ⑤自然環境との調和 ⑥地域の歴史・文化遺産を考慮した発展であり「伝統の再創造」があること ⑦資源浪費型・生活の他者依存型のという近代的ライフスタイルからの脱却 ⑧様々なリーダー（キーパーソン）がおり、協力関係があること ⑨運動が迅速であること ⑩外部との交流があることである³。

「内発的発展論」は、社会変動を考えていくときの一つの考え方であるが、価値中立的ではない。むしろ上に記した10の要素を価値判断の基準、すなわち良いもの、望ましい基準であると判断する。その意味で啓蒙思想である。そして実際の地域でどのような地域価値が生まれたかを発見・記述・評価し、教訓として社会に伝えていく。その意味で教育学である。また、その価値評価的な判断によって、地域の人による変革を推奨し、地域の人々によって知恵を出し、政策に反映させる政策科学である。内発的発展の担い手は、地域の住民であり、地域の行政であり、地域の政治家であり、地域の企業であり地域の社会団体である。また、外部の調査者・研究者が調査を行い、地域に伝える。外の地域との交流があり、自分たちの地域と比較し、他の地域のアイデアを学び、地域にフィードバックしていく。それぞれがそれぞれの立場から内発的に考えるのが、内発的発展「論」である。

現実の地域は常に変化しているので、実際の評価は、ある時期を区切ったときの地域の発展の相対的な評価であり、また対象となる研究と施策は、たとえば「福祉」「環境」という社会の限られた部門であることもある。内発的発展は常に進行形であり、ミクロの視点を大切に、それゆえ断片的で、大局が見えてこないという指摘があるかもしれないが、ミクロを記述分析することから見えてくる社会変動の実際もある。

この論文では、長野県を流れる千曲川（下流の新潟県では「信濃川」と呼ばれる）の右岸にあり、県庁所在地の長野市の中心部からそれぞれ東に10～12キロメートルほどの位置にある善光寺平の東端にある二つの地域社会、小布施町と長野市松代地区の「地域おこし」の特徴を見ていく。

両者は、中山間地に位置し、千曲川の河川氾濫原と千曲川支流が善光寺平に流れ出る扇状地からなり地形が似ていること、長野市の中心街とともに40分～1時間の距離にあり、長野市のベッドタウンであること、ともに地域に独自の農業があること、独自の観光資源を持ち、ともに観光地としても知られていること、人口が1万2千と2万1千程度で規模がほぼ同じであることなどの共通項がある。

他方、小布施町が他市町村との合併をせずに小さな「町」として生きる道を選んだのに対して、松代は1966年（昭和41年）に長野市と合併し、以後、議会や独自の行政機関を持たない。小布施は江戸時代、商業を中心に栄えた町であったのに対して、松代は真田藩の城下町で、武士の町であった。小布施は、観光政策に1970年代に取り組み始めたが、松代は最近になって観光資源の発掘・開発を始めた。小布施の農業は栗・リング・ブドウ等の果樹中心だが、松代の農業は米と山芋と杏である。小布施は花卉栽培が盛んで洋種もさかんに植栽されており、花卉栽培が町の産業の一翼を担っているが、松代は在来種を中心に武家屋敷の庭園や寺院、周辺の山に緑あり、花卉栽培は産業にはなっていない。

両者は地形や規模は似ているが、行政区分や産業政策、自然環境作り、町並み修景の方法等が対照的である。本論文では内発的発展論の10の要素を参考にこれらの違いを見ていき、その課題を浮き彫りにする。ただ、ここで扱うのは、調査の制約上、⑤自然環境の保全と利用、⑥伝統遺産の活用、⑧町おこしの主役やリーダーたちの役割、リーダー達の関係、⑩外

部と地域のつながり、今後の町おこしの展開の予想である。ただし、これらのテーマに絡めながら、③運動の主体としての地域住民、⑨運動の迅速性などにも触れていく。

自然環境 (地形図・地図参照)

ともに千曲川右岸にある。より正確に言うならば、小布施は千曲川を西の境界に、雁田山を東の境界に持ち、東からなだらかに千曲川に向かって下がっていく傾斜地にある。南の境界である松川の上流の扇状地が、高山村である。小布施は扇状地の扇の開いた北半分を占める。また、小布施の北部の稲作地帯は千曲川の氾濫原を開拓してできた。松川の水は、古くは灌漑用水や飲料水に利用されていたというが、PH 4 の鉱毒水で、飲料には適していない。しかし、小布施名産の栗の栽培には適している水である。この松川から引いた水路が現在でも勢いよく街中に流れている。この水路は街中では暗渠化されていて、水の流れる音だけが街中で響く、現在の水道の水源は雁田山の麓と街中に6カ所ある⁴。飲料水はここで得られている。

小布施の町の中心には、南北に道幅の狭い国道403号線（中野市と更埴を結ぶ）が走る。また、そのバイパスとして現在では一般に「北信濃くだもの街道」と呼ばれる県道358号線が山麓側に走る。この2つの道路は千曲川右岸を南北に走る幹線道路で、産業道路であり、トラック等の交通量が多い。また、小布施は北部には水田があるが、市街地をのぞいた南半分の大部分は果樹園である。果樹への農薬散布と、国道・県道を通る車の排気ガスで、農村部としては意外と空気が悪い。小布施では、町の主要な観光施設あるいはその近辺に駐車場が完備され、「車」で観光できる町になっている⁵。一部には長野電鉄と徒歩、あるいはレンタサイクルを利用する観光もあるが、若干の坂があることと、長距離を移動すると空気の悪さに観光客は悩まされることになる。この環境の悪化は長期的には小布施につきまとう問題となろう。

一方、松代は、幹線道路が、町の西側の高速道路と平行して走っており、町の中心部には通り抜けの車はあまり入ってこない。有害な排煙を出す工場も街中には無く、排気ガスが少ない町である。街中には、木造の家、土壁・漆喰壁が多く、数多くある武家屋敷には、手入れされた樹木が育ち、町中にコンクリート臭がほとんどない。昔懐かしい落ち着いた土壁と緑の薫りがする町である。また、町内を三方から囲んでいる山々も、上から下まで雑木林または杏の果樹園である。いわゆる斜面林が麓の市街地近くや田畑の辺まで広がり、これが松代の独特の景観を創っている。平地部には寺社林も多い。街中に堂々とした緑の「島」が沢山ある。山には山芋畑や斜面には杏畑もあるが、平地部は米作中心の農業で果樹園と比べて農薬の散布で大気を汚すことは少ない。「空気がおいしい地域」になっている。また、三方の山が重機による開発がされていないので、人工物がほとんどない山の景観は、日本昔話の絵本に出てくるような風景である。町の中心部からは、緑に包まれた独立峰の死火山である皆神山と、東条地区の北東の山の斜面に張り付く杏林を遠望できる。これらの風景が見事である。

平地部では、武家屋敷が多く残り、敷地内の屋敷林が落ち着いた緑の町を作る。屋敷前には「カワ」と呼ばれる水路がある。また、武家屋敷の庭園の池に、隣の家敷地から流れ込む「泉水路」と呼ばれる水路がある。そして屋敷の裏の畑に水を供給する「セギ」という第三の水路が敷地の背後に流れる。こうして3本の水路が家屋敷の前、中、後ろに流れており、

それが未だに保存されている。「カワ」は暗渠化された所も多く、また「セギ」も目立たないが、一部、昔のせせらぎが街中でも見えるように、「カワ」の被いを取り払う場所も出てきた。「泉水路」は「風流」を楽しむという意味もあったが、昔は水が流れ込む各家の池には食用の鯉が、残飯等を利用して飼われていた⁶。鯉は江戸時代、貴重なタンパク源であった。また、鯉は雑食で水路の掃除屋でもあった。昔はどの町にもあったであろう、豊かな水路を復活させる町づくりが現在進められている⁷。現在、一部の泉水路や「カワ」は枯れてきているが⁸、それでも多くの水路が、残っている。

小布施と比べると、松代の花弁・樹木には在来種が多い。武家屋敷・神社仏閣では、日本の在来種がよく似合う。また、洋風のガーデニングより、和風の生け花教室が盛んである。

小布施と松代の歴史

小布施は、千曲川右岸に並行して走る南北の街道筋に、善光寺から高山村・上田に抜ける街道が交差する地に当たり、江戸時代、六齋市といわれる、3と6の付く日に、月6回市が開かれた。北信濃の商業の中心地であった。また、小布施は、品質の高い栗が取れる土地として有名で、幕府の御料地となり、それを松代の真田藩が管理するという体制が取られていた。町には、豪商の高井家があり、特に幕末の高井鴻山（1806～1883）は、文化人としても優れ、葛飾北斎を晩年小布施に招き、もてなし、アトリエを与え、自らも画を楽しむと同時に、北斎に多く肉質画を残させた。現在北斎のアトリエと鴻山の家や蔵が、高井鴻山記念館として残っている。

1976年（昭和51年）には北斎の肉質画を集めた「北斎館」が開館し、1983年（昭和58年）には、小布施町の第二次小布施町総合計画が策定されたが、その中で北斎館周辺を歴史文化ゾーンとして位置づけ、北斎館近くにある町営の高井鴻山記念館、栗菓子屋の小布施堂と鴻山の血を引く小布施堂の経営者であり当時の町長であった市村郁夫氏の屋敷、その親戚筋に当たる市村公平氏の屋敷、長野信用金庫の地所、他個人宅二軒の計五軒の「修景」事業が始まった。この事業は、事業組合も作らず、行政がリードすることなく、公的な補助金も利用せず、上記五者が対等の立場で、また、自分たちの知恵と資金を持ち寄って、毎週1回以上計100回以上の検討会を開き、「修景」事業を行った。当時、国道の拡張計画、また国道に面した個人宅が国道の騒音・振動に悩まされたことから、これらの問題を解決する必要もあった。

この事業は、できる限り古い住居を壊さずに、曳き屋で移動させ、互いの土地に移動し、借地料を貸し手と借り手双方が納得できる、相場にとらわれない金額に設定し、新しい建造物を建てる時には、周りの風景にマッチしたものを造ることに腐心した。小布施堂は、工場の敷地を移転せず、新工場を、その一部が外から見えるようにガラス張りにし、また周囲の塀の一部を取り壊し、街の広場にするにより、半公共的な空間を演出して見せ、⁴ 観光客と工場従業員の行き交う賑わいのある風景を提供した。敷地内の樹木は極力切り倒さずに、活かす方針とした⁹。五者が利用する駐車場は「幡の広場」と命名され、アメニティ広場としての活用も考えられている。今「幡の広場」となっているところにあった長野信用金庫は、市村公平邸の敷地内に移動した。また、小布施堂の古い蔵は、アメリカ人従業員セーラ・マリ・カミング氏のプロデュースにより「蔵部」という、杜氏のまかない料理である「寄り付き料理」をテーマとし、炭焼き釜で米を炊くことにこだわった小布施で最も特色のあるレストランの一つに生まれ変わった¹⁰。

なお、これらの事業は町並み「修景」と呼ばれているが、最初に画一的な開発計画を作り、それに基づいて古い町並みを復活するのではなく、また全く新しい町並みを「創造」するのではなく、当事者が建築事務所を交え、協議を重ね、それぞれの役割を決め、これからの小布施にふさわしい町並みに変えていくことを意味する小布施で生まれた「新語」であった。

この事業は、1986年に「潤いのあるまちづくり優良地方公共団体自治大臣賞」と「日本建築学会北陸支部文化賞」を、翌1987年には「地域文化デザイン賞」を受賞している。

この修景事業によって、北斎館と高井鴻山記念館が回遊路で結ばれ、両方の展示施設の行き来がし易くなり、また小布施堂と小布施堂が経営するイタリアンレストラン傘風楼、蔵部、小布施を代表する他の二つの栗菓子店経営のレストランが新たに周囲に開店することによって、美術と食と景観が一体となった小布施の観光資源集積地区が生まれた。この比較的狭い地域の観光資源集積地を皮切りに、その周辺にも、次々と美術館・博物館・栗菓子店・栗強飯の和風レストラン・蕎麦屋が建てられた。2004年現在、小布施の飲食店総数は51に上るといふ。しかも、それぞれが、小規模ながらも地域の景観にマッチした店の造りとなっており、安かろう、不味かろうの飲食店ではない。飲食店を開く者は町外から転入してきた者が多いが、外部の大手外食産業は今のところ入ってきていない。

一方、松代は戦国時代、武田信玄が川中島合戦に際し山本勘助に命じて造らせた出城、海津城に始まる城下町で、江戸時代は信州真田藩10万石の城下町¹¹となり、善光寺門前町と並んで善光寺平(=長野盆地)の中心都市となった。町は西側を千曲川、三方を山に囲まれ、また海津城=現代の松代城も千曲川と堀で囲まれた城であった。明治維新後も城下町の風格は残ったが、城は明治6年に消失した。真田氏の家系は現在でも続いているが、当主は東京に出てきている。現在では、松代藩の藩校であった文武学校、真田屋敷、城址、真田宝物館は、長野市が管理している。

また、第二次大戦末期、松代は政府・天皇の疎開先選ばれ、「松代大本営」と呼ばれた、山をくりぬき、トンネルを縦横に張り巡らされた施設が建設された。結局は、この施設は使われなかったが、現在、松代の観光スポットの一つとなっている¹²。

埴科郡松代町は、1966年(昭和41年)に長野市に合併された。およそ人口2万1千人の集落としての城下町は残った。現在の人口は約2万人である。合併後、松代地区を仕切る自治組織は無くなった。現在松代地区からは現在3人の市議会議員を出している。住民の多くは、地元の商業施設・公の機関で働く他、長野市や近隣の市町村に通勤して、生活を成り立たせている。県庁所在地である37万人の長野市がなければ、松代は現在の生活が維持できなかったであろう。

この町の特徴は、武家の子孫の町で、屋敷に関しては未だに長子相続を行い、武家屋敷の風格を今に伝えている。分割相続によって、屋敷を売り払うことは「恥」だと考える文化を持つ。土地や家を売って一時的な金を得るよりは、先祖から引き継いできた財産を守ろうとする「家」意識が強い。それゆえに、家屋敷は売却せずに、代々受け継がれてきた。昔の地割り、町の区画、車が入りにくい小路も残っている。屋敷は建て替えられたものも多いが、和風建築にこだわる。また、祖先より受け継がれてきた家を改築しながら大切に使っているものも多い。武家屋敷の庭には必ずと言って良いほど、「泉水路」からの水が流れ込む「池」がある。屋敷周りには堀を巡らす。一時はブロック堀が

多かったが、ここに来て、屋根瓦付きの土塀や漆喰塀に戻す家が増えてきた。また、屋敷の入り口には武家門を構える家も多い。その種類も、薬医門、冠木門、長屋門、腕木門、棟門と様々である。古い家の門は車の出入りができないが、車が出入りできる武家門もある。

また、古刹も多い。古寺は33を数える¹³。商家の家である町屋にも古いものが残る。また、松代小学校の一部として特別授業に使われている元「松代藩文武学校」は、弓道場、剣道場、柔道場、講義場等から成り、現在でも各種武道競技や文化イベントに活用されている。

建造物等の歴史的文化的財は、松代全体で500余にものぼるといふ。松代は歴史的文化的遺産を多く抱えるが、文武学校、真田屋敷、宝物館、象山神社¹⁴、松代大本営を除いて、つい最近までそれらを地域の宝、観光資源として使うことはなかった。松代は歴史的景観が徐々に失われていく、静かな「普通の田舎町」になりつつあった。

日本的な街並み風情・修景の手法

小布施も松代も、和風建築の家が街中に多い。商店にも日本の家屋が多い。しかし、その形状や町並み事業のコンセプトや方法は大いに異なる。

小布施の家々の特徴で、まず目につくのは切妻造りの三角屋根である。古い家ばかりではなく、新しい家の屋根も圧倒的に切妻造りで、入母屋、寄せ棟、方形造りの屋根や、平らなコンクリートの陸屋根は少ない。駅舎、交番、商工会館、食堂、和菓子屋、ユースホテル、プチホテル、フランス料理店、美術館、ライスセンター、ドライブイン、蔵、病院、教会の屋根も、切妻造りである。これらの建物の壁は、必ずしも伝統的な板壁や漆喰壁、土壁ではなく、近くでよく見るとボードに塗料を吹き付けた現代建築のものも目に付く。つまり、一見古い日本建築だと錯覚する町並みは、「切り妻」をベースにした現代の和風建築の集合体である。マンションはもちろん、高層建物はなく、田舎の町の景観にマッチした落ち着いた雰囲気町全体にある。小布施では比較的大型の建築物である和菓子屋が経営するレストランも、切妻造りの屋根を持つ。商店街では、派手な大きな看板は降ろし、小さな看板はあるが、遠くからは何の店か判断がつかない店が多い。

夜、商店は単にシャッターを閉めるというのではなく、ショウウィンドウにディスプレイを施す店もあれば、大壁をライトアップしその存在を強調した店もある。間接照明を用いてお洒落な夜景を演出している。夜の風景にこだわる地方都市は珍しい¹⁵。

また、家々は、その周囲を全てブロック塀・コンクリート塀で囲むという家が比較的少なく、生け垣、あるいは低い塀に生け垣、敷地の正面をオープンにしたものが目につく。

小布施には、「オープンガーデン」という制度があり、「オープンガーデン」のプレートを掲げた家々の敷地では、観光客が家の者に断らずに自由に庭を見学できる¹⁶。各家は、手入れの行き届いた庭園で観光客をもてなす。町の人々も園芸を楽しんでいる。家の庭ばかりではなく、主要な道路や学校・駅・広場も「花」で飾られ、花壇はいつも手入れされている。街中の花壇の、そして家々のガーデニングに使われる花卉や庭木は多種にわたり、在来種ばかりでなく、園芸種・外来種も多い。各家のガーデニングにはテーマがあり、華やかな様々な園芸種の花を中心にした庭、庭木をテーマにした庭、和風庭園の趣を持った庭等々である。園芸はこの町の一つの「文化」であり、後で述べるように「産業」にもなっている。

現代日本の多くの一戸建て住宅は、周りを塀で囲み、小綺麗に見せようとするが、規格型の家が増え、また手入れは極力しないですむように作られている。外に対しては生活を

見せない、視覚的に開かれていないものが増えてしまった。しかし、小布施では、庭を見せることによって、町の人どうし、観光客と町の間で交流を図っている。人々は町を短時間で通り過ぎるのでなく、立ち止まりながら町を歩く。最初団体旅行でやって来て、小布施観光の目玉「北斎館」に短時間立ち寄った観光客が、それでは物足りなくて、リピーターとして再びやって来るときは、おいしい和菓子や蕎麦、ワイン、フルーツの加工品を求めるだけでなく、また小さな美術館や博物館などの観光施設を訪れるだけでなく、街の一寸した手入れされた空間に惹かれてやって来るのである。また、町の人々は花の植え付け、手入れを業者に任せるのではなく、なるべく自分たちでやることによって地域の交流を図り、自分たちの趣味にもしている。

それでは、このような景観はどのようにして生まれたのだろうか？

住宅造りに関しては、北斎館周辺の修景活動が盛んになった頃、「第二次小布施総合計画・後期基本計画」（1986年）で、「うるおいのある美しい町」の章が付け加えられ、「環境デザイン協力基準」が作られた。地域ごとの住宅計画の課題や目的を定めるとともに、住まい作り相談所が開設され、修景地区の構築に携わった建築家の宮本忠長氏などが相談員となった。1990年（平成2年）には、「小布施町うるおいのある美しいまちづくり条例」が制定され、「環境デザイン協力基準」¹⁷が改訂された。92年には「住まいづくりマニュアル」「広告物設置マニュアル」「生垣作り助成要件」など細かな基準を定めたが、これらは、強制や規制という形ではなく、景観作りに向けての地域の共通の指針として、住民に共有されるものとなった。そして、「協力基準」に基づいた家の改築・新築が進んでいったのである。

小布施の「花いっぱい運動」は、1975年小布施中学校緑化部が発足し、生徒による温室での花作り、学級花壇造りがきっかけだったという。1979年には学校の温室で育てたサルビア、ストック、キンセンカ等を老人ホームに配る「花いっぱい運動」が始まった。1980年には「町を美しくする事業推進協議会」が結成され、「花いっぱい運動」に、老人会、小布施ライオンズクラブ、各地域の育成会や自治会も協力するようになった。1988年には「花の町フェア」が開催され、北斎・鴻山特別展示会場での花のプランター展示、雁田山山麓の「せせらぎ緑道」の花の植え付けが行われた。その後「花いっぱい運動」はますます盛んになり、竹下政権時の「ふるさと創生一億円事業」を活用して、「ヨーロッパ花の海外視察研修」が平成元年から平成9年まで実施され、延べ107名が参加した。帰国した者は、「花端会議」「創造の会」「あすか会」「インブルーム」「花トピア鳥羽」「ヨーロッパ花の会」「栗ヶ丘小学校の草花委員会」などのグループのリーダーとなっていった。「町を美しくする事業推進協議会」は、1990年（平成2年）には、「花づくり推進協議会」となり、町内の各地域と協力して運動を進めた。「第三次小布施総合計画」の基本方針の中に「花いっぱい運動」は盛り込まれ、1991年には、「花のふれあい公園」建設に着手、翌1992年には「フローラルガーデン小布施」としてオープンした。この施設は北斎の鳳凰図を形取った回遊式のフラワーガーデンと熱帯植物などの温室から成り、その管理育成は町の農家の人と「フローラルガーデン小布施の会」が協力して行っている。また、「フローラルガーデン小布施」は、花の育成の相談や情報交換の場所となり、ガーデニング普及の中心となっている¹⁸。

学校教育から花のいっぱい運動が始まったのが興味深い。また、ふるさと創生一億円事業は、無駄に使った自治体も多いと聞くが、箱物作りではなく、人々の啓蒙活動、町おこ

しのもメンタムを高める活動に活用したことは興味深い。小さな町、小さな区域、小さな人口だからこそ、町全体の人々の凝集性があり、花と景観に意識を集中できたのではないだろうか。

一方松代は、住民である武家の子孫のプライドが家屋敷と守ってきた伝統があったが、近年、松代の文化財が急速に注目されるようになった。

長野市は1983年（昭和58年）4月、歴史的かつ文化的な遺産としての伝統環境を保存し、後代の市民に継承することを目的として、「長野市伝統環境保存条例」を制定した。この条例に基づき、松代地区では、四町（表柴町、代官町、馬場町、竹山町）が伝統環境保存区域として指定され、区域内で保存計画が作成され、該当地区住居の塀・門・屋敷・庭・池等が老朽化し、改築・修理が必要とする場合は、届け出が義務づけられ、伝統環境を構成している庭園・水路の修理や、景観に調和した門・塀の復元などについては、指導・助言・補助金を受けることができるようになった¹⁹。市の予算は限られているが、それでも毎年5件（軒）前後の案件が補助の対象となり、補助金が交付され、伝統的な景観を再生しようとしている。それは、必ずしも昔のものの復元ではないが、小布施と比べると、土壁・漆喰壁・瓦屋根等より伝統的な素材と技法を使った建築に特徴がある。条例が施行されてからすでに25年経過し、多くの建物や壁・門が修復・修景され、落ち着いた町並みが現れてきた。市の姿勢とともに、住民にも家屋敷を守りたいという想いや誇りがあるからこそ、この町並み「保存」事業は可能であった。

2001年（平成13年）11月、鷲澤正一氏が長野市長となった。鷲澤氏は、長野市の観光が善光寺一極集中型であることから、もう少し裾野を広げたいと思い、真田の城下町松代に目を付け、松代城の復元事業を進めさせた。そして、2004年～2005年には「エコールド松代」（松代学校）という二年間にわたる松代観光のプロモーションにテコ入れをした。松代に困んだ様々な「生涯学習」、すなわち歴史的建造物を活用して行う講座、松代ウォークという松代の町並みと農村の景観を楽しみながら歩くイベント、武家屋敷訪問、ガイド付きの町並み歩きなどのイベントを用意し、首都圏にもパンフレットを出して、松代を宣伝した。前年度の年間訪問者が30万人だったのが、2004年には80万人に急増した。「エコールド松代」という取り組みは、現在でも続いている。文武学校、真田屋敷などを使った各種講演会が行われたり、地元の各種生涯学習の会「エコールド松代倶楽部」が、各種、趣味の発表とともに、松代を訪ねてやって来た者をボランティアでもてなす。たとえば琴のグループは、毎月の練習とともに、イベントがあるときには、真田邸など文化財で琴の演奏でもてなし、合気道・古武道のグループは、鍛錬の成果を演舞会・講習会等で披露して、松代の文化を訪れる者に伝え、交流する。町おこし紹介のグループは街歩きのガイドツアーを実施する。このように町外・県外の訪問者を意識した各種地元文化紹介のイベントが、松代にはたくさんある。

2007年にはNHKの大河ドラマ「風林火山」で川中島の戦いが取り上げられ、戦跡の海津城や山本勘助の墓がある松代はますます注目されるようになった。松代には、秋には「真田十万石祭り」という大名行列の祭りもある。後に紹介するNPOの動きも含めて、松代では、ハードだけではなく、住民のソフトの点においても、伝統の再創造が行われている。

地域おこしのリーダーたち

小布施の観光地としての人気の礎を創れたのは、高井鴻山と葛飾北斎という傑出した人物がこの地に残した歴史と有形文化財があったからといえるだろう。しかし、小布施の修景事業を始め、現代の観光地小布施のきっかけとなったのは、修景地区の当事者五者、とくに音頭を取った現小布施堂社長、市村次夫氏だろう。公共事業ではなく、住民・地元企業・町・建築家との水平的な協議を通して、生活者の住みやすさと、事業のしやすさ、発展性、そして観光地作りを追究した。地域としては小さな地区の、しかし個人としては人生を掛けた大きな英断であった。この地区を中心に、小布施では「結果」として、さらにその周辺にも飲食場所、土産物店、美術館等の展示施設、案内施設の建設や道路整備、そして修景事業が展開していった。

しかし、小布施の地域おこしは、景観を重視した観光地作りだけではなかった。小さな町ながらも、したたかな産業政策が小布施にはあった。小布施は、もともと栗の産地として江戸時代から知られていたが、その後も常に、時代をリードする農産物を産出してきた。農業革新を続けてきた小布施の農家の人々と、それを支えた行政、現在ではとくに第六次産業センターの産業リーダーとしての役割は大きい。

小布施は、栗の他、リンゴ、ブドウ（巨峰）、モモ、ナシといった高級果物に早くから目をつけ、さらには、それらをジャム、ジュース、ワイン等に加工して現地で売るという第六次産業という考えをいち早く戦略的に取り入れた。また、通信販売で小布施ブランドを売り込むことをやった。小布施の物産展を、大都市圏で、団塊の世代が多い場所で売るというマーケット戦略を立てた。花いっぱい運動から始まった、花卉栽培という高付加価値作物の生産へと次の布石を打つという流れも作った。ここでは、小布施の農業政策の歴史と、現在の第六次産業センターの役割を探っていこう。

明治の小布施は、栗とともに、養蚕のための桑の生産が盛んであった。大正時代になると、優良品種の「祝」「印度」「デリシャス」「国光」「紅玉」といったリンゴの品種を小布施でもいち早く導入し、昭和8年には、リンゴの栽培本数は2810本、収穫量は93.75トンとなった。水利に恵まれない小布施では、農業の活路をリンゴに求めた。第二次世界大戦直後の食糧難の時代には、「リンゴの歌」で象徴されるように「赤いリンゴ」への需要は高く、とくに「国光」や「紅玉」の人气が高かった。「国光」は晩生種で保存がきき、色づきも良く、「紅玉」は無体栽培が普通で色が良かった。小布施の「紅玉」は、青森産よりも二週間早く出荷できる利点があった。

1956年（昭和31年）には、リンゴの作付面積は長野第一位となった。1962年には、リンゴの作付面積は630ヘクタールに達した。しかし、1968年、リンゴはバナナの輸入自由化に押され大暴落し、また、西日本では柑橘類の大増産が進み、他の果物との競争が激しくなってきた。小布施では、高接ぎで、リンゴの品種を「ふじ」、早生種の「つがる」に変えたり、あるいはリンゴ園を潰して「もも」「巨峰」等へ転換する農家も現れた。昭和43年には、リンゴ腐乱病が発生し、リンゴ一辺倒のリスクが高いことを思い知らされた。小布施は、リンゴの共選所（1950年）、リンゴ冷蔵庫の導入、選別のオートメーション化、品質の改良と選別の徹底化と「小布施ブランド」の確立（1968年）、干ばつ対策のための灌漑施設（1961年）、その後、米の減反政策のあおりを受けて、稲作からの畑作への転換、高級果物である巨峰、モモ、ナシの作付け地の割合を増やすなどの農業の近代化を次々に行った。また、1970年代からアスパラガス、小布施丸茄子、キノコ類等の野菜生産、花卉栽培の試

み等も見られた。

平成に入ると1994年（平成6年）には、「認定農業者制度」を取り入れ、農家が、経営規模の拡大、生産方式・経営管理の合理化・労働条件の改善などを町から査定され、高度な経営手腕をもつと認定されると、農地売買上の税の得点や借入資金の利子補給などの得点を得られる。近隣の市町村と比べると小布施には、この認定農業者の数が多く、やり手の農家が多いと言われている³⁰。

平成11年「食料・農業・農村基本法」が施行されると、小布施でも食糧の安定供給確保と農業の持続的発展と農村振興を掲げながらも、消費者重視の食糧政策を掲げた。町は、唐沢彦三町長の下、雇用と付加価値を創出するために、農業生産（第一次産業）と農産物の加工（第二次産業）、そして販売／情報・観光（第三次産業）を掛け合わせた「六次産業」を目指し、小布施振興公社＝第六次産業センターを創設した。この施設では、当初、農家に作業所を提供し、たとえば、果物から新しいお菓子、野菜から新しい加工品を開発させ、実験的にセンターで販売、あるいは各農家が持ってきた果実を搾り、ジュースにし、それを「小布施ブランド」というよりは「各農場ブランド」で販売することを援助した。また、商品化の方法論が確立したら、自立するように促すという指導をした。さらに、小布施振興公社のコーディネーションで、小布施物産展を、主として大都会で開催し、そのとき、農家にも販売の現場の厳しさと楽しさを経験してもらい、農業経営にフィードバックさせるという指導をやっている。小布施の農業は、「長野物産展」という形ではなく「小布施物産展」という形で開けることができるほど、商品の量・種類・質が確保されている。そして質の良い商品をそれに見合った価格で売ることができる。

物産展を大都市圏で開くとき、経済的に余裕のない若い世代や子供が小さなファミリー層の多い市場は避け、小布施の栗菓子、高級果物、農業加工品を買いたいと思う可処分所得が多い団塊の世代を中心とした市場をターゲットにして物産展を開く。第六次産業センターでは、また「小布施屋」というブランドで、一箱五千円から一万円の「リンゴ」「ブドウ」「モモ」などの通信販売用の商品も用意しており、品質にこだわる一定の客層が付いている。これら的高级果物やその加工品の通信販売では、一部の小布施の農家も独自ブランドで試みている。センターとしても、統一された「小布施ブランド」ではなく、小布施にいくつものブランドが育っていくことを願っている。

また、花卉栽培は新しい農業だが、小布施では、町が農協や生産者に呼びかけてすでに1970年（昭和45年）に「花卉振興研究会」を設け、1971年には農協が「シャクヤク部会」を、73年には「ライラック部会」をつくった。現在、小布施の花弁生産は、農業粗生産額の数パーセントしか占めていないが、「花の町小布施」が知れ渡るようになった。育苗センターでは、ポットに種植えをし、ある程度育ったところで、農家に廉価で売り渡し、育てさせ、それをもう一度、少し高い値段で買い取る。それを町が運営する観光植物園、花卉販売所兼、指導所、レストランを兼ね備えた「フローラルガーデン小布施」で販売するというように、生産の拠点、農家への生産へのサポート、販売ルートを振興公社が用意している。公社は市場の動向も追っており、どのような花卉が翌年売れそうかを調査し、予想して育苗する。また、東京の画廊で行われる美術展のスケジュールを調べ、小布施で栽培されている胡蝶蘭のセールスを試みる等の市場調査を行っている。花卉には様々な販売ルート・ビジネスモデルがあるようだが、その情報集めの一角を第六次産業センターが

担っている²⁾。

小布施には、一般国道と高速道両方からアクセスできる道の駅、「ハイウェイオアシス小布施」がある。ここでも、小布施の物産を農家が直接販売できるコーナーを設けている。このように生産者が消費者と直接接点できる場と機会が多く設けられていることも、小布施の農業の特徴であろう。このような仕掛けによって、外部の人間が、知らないうちに「小布施」の物産に触れ「小布施ブランド」を刷り込みされていき、片や小布施の農家は、消費者をより近くで意識し事業を行うようになる。

一方、松代であるが、今回の調査では、とくに農業の発展については調べなかった。というのは、松代は、農業では米作が中心であり、一部にアンズ林と、山芋（長芋）畑があるものの、それが「松代ブランド」という形では確立しておらず、また地元の食材をテーマにした郷土料理、食品がこちらには伝わってこなかった。松代には地場の山芋料理の専門店「かじや」や松代に進出した小布施資本の「竹風堂」がムカゴを栗強飯定食に出したり、あるいは地元のそば屋が「とろろ蕎麦」を出したり、つなぎに「長芋」を使うが、長芋の産地であるにもかかわらず、一般の人々には松代＝長芋と結びつかない。せっかくの農産物も農協のルートに乗るばかりで、一般消費者、観光客には知る仕掛けがほとんど無いのである。「長芋」だけだと、調理の仕方も限られており、主菜にならない。他のものと併せてブランド化する必要があるのだろう。

今回の調査では、町が長野市に合併されてしまったため、松代という地域が、どのような「組織」をもって、町おこしを行い、現代の松代の活性化につなげていったのかを追うことにした。

1966年（昭和41）年に松代町が長野市に合併したとき、松代町の商工会議所は、長野市の商工会議所に合併せずに残された。この商工会議所が近年までの松代の町おこしの牽引車になってきた。昭和50年代（1975～84年代）に長野道の松代インター誘致するために動いたのは松代商工会議所であった。木町商店街の道路拡幅運動の中心は商工会であった。1990年（平成2年）観光用の人力車の運行を始めたのは商工会議所の若手有志だった。

1994年（平成6年）長野中小企業指導所が「地域資源活用型再生計画」を策定した。それを受けて、松代では商工会議所が松代の歴史的文化的資産を活用することを打ち出し、翌年、その実現を図る為、会議所内に「まちづくり推進特別委員会」を設置した。そして「景観によるまちづくり部会」「味によるまちづくり部会」「文化によるまちづくり部会」を立ちあげた。1995年（平成7年）には、木町の道路拡幅が決定したが、木町では「木町まちづくり協議会」を結成し、会議所の「まちづくり委員会」と共催して7回にわたる研究会を開いた。また、滋賀県長浜の黒壁、彦根のキャッスルロード、三重県伊勢市のおかげ横丁、長野市の大門町などを視察した。結果をまとめ、木町まちづくり協議会として「城下町らしい街並み整備の景観協定」を町の当事者と結ぶ。一方1996年（平成8年）には、真田宝物館の文化財ボランティアの養成講座が開かれた。1997年（平成9年）には、「松代まるごと博物館構想」が会議所から提案される。1998年（平成10年）商工会議所の「まちづくり推進特別委員会」が「城下町松代街並み景観賞」を創設する。ここまで、商工会議所が中心となって、ある意味では松代から消失してしまった行政や議会の代わりに、松代のまちづくりが進められてきたのだが、商工会委員、すなわち町で商売する人だけが、まちづくりの中心となり、他の一般市民が置いてきぼりを食ってしまう形になってしまったことに、非難の声も

出始めた。

2000年、松代では「夢空間松代のまちと心を育てる会」（通称「夢空間松代」）という任意の市民団体が発足した。商工者だけではなく、広く市民にまちづくりについての参加を求め、連続セミナー、後援会、町並みウォッチングイベント、お庭拝見ツアー、まちづくりワークショップを積極的に開催した。退職後の男性がまず参加し、区長経験者も入ってきた。そして徐々に若者、女性も入ってきた。オープンになっている各種イベントには県外の参加者もあった。

6ヵ月かけてワークショップを行い、「旧山寺常山邸再生活用案」の市への提案にこぎ着けた。町並みウォッチング、寺社見学会等は、数冊の興味深いこだわりのあるガイドブック発行という形で実を結び、また常山邸は、後に長野市が買い取り、地元住民有志が有償ボランティアで管理し、訪問者に無料でオープンする文化財施設となった。泉水路の研究報告書が出版された。これらの視察・調査・ワークショップ・討論の過程は、実際の文化財の保存・活用につながっていった。

長野市は2002年（平成14年）に国土交通省の「街並み環境整備事業」を導入し、松代では1年掛けて「街並み環境整備事業計画」を策定、この事業計画は各地区の区長が計画のひな形を造り、住民の八割が合意できると、国から補助金が交付されるというものであった。行政指導がというよりも、地域住民が自ら策定に関わることによって、補助金が得られる仕組みである。

「夢空間松代」は、2002年（平成14年）にNPO法人資格を取り、任意団体から法人格組織へと発展し、行政とのパートナーシップを取れる、また団体としての資産を所有でき、公の補助金を活用できる組織となった²²。

この頃、長野市は、市が近隣市町村との合併を繰り返し、松代のように市内各地区の自治が空洞化している問題をとらえて、長野市の各地域の自治、地域内分権を押し進めるために「住民自治協議会」を創ることを提唱した。松代は積極的に動いた。ただ、ここで組織された「松代地域住民自治振興会」は、自治会（区長会）、農協、商工会議所²³、地区社会福祉協議会、民生児童委員協議会、子供会、老人会、婦人会、河川愛護会、PTA、日赤奉仕団等、いわば、既存の古いタイプの地域組織の集合体で、松代の住民の間では、家の格式・長老支配等の、市民間の上下関係・権威関係の呪縛に拘束されやすいものになり、市民水平型、ネットワーク型のNPO組織と馴染まないものになってしまった。自由意志で参加し、フットワークの軽いNPO組織による地域おこし団体と、いわば行政指導で造られた既存の社会的役割を担っている団体の集まりである「住民自治協議会」は、性格が異なる。双方に参加している者もいるが、互いが互いを牽制しあうのではなく、むしろ互いの役割分担を交流の中で構築していくことが、これからの時代に求められる。

12 このように松代では、長野市への合併し、行政・議会が地元から消失した後、まず松代商工会議所がまちづくりの担い手となり、次に商工会議所だけではなく一般市民も含めた運動として「エコールド松代」実行委員会（2004年）やNPO法人夢空間松代という動きがあり、そして、ちょうど松代商工会議所が長野市商工会議所に統合される頃（2006年）に「松代地域住民振興会」が生まれた。松代地区の発展は、このように「非公式」の市民の自主的な動きによって支えられてきた。「住民自治協議会」とは、大きくなりすぎた市域全体を扱う「市議会」では捉えきれない、地区の問題を協議・解決する新しいフォーラムを、市の音頭で作ろうというものである。市としてはNPO法人の参加も望んでいる。「住民自治協議会」

に発展しようとしている「松代地域住民自治振興会」は、地元社会の中で今後どのように位置づけられ、また市とどのような協働関係を構築するのか、それはこれから見えてくることである。

地域と外をつなげるもの

両地域を観察すると、ともに、外に開かれた交流・情報収集の場があり、それを担う組織あるいは人物がおり、そのことが、地域おこしを活性化している。それを見てみよう。

小布施では、小布施という地域と外を広げる一番大きなメディアは、「栗菓子」と「北斎館」である。この2つは、小布施の二大アイコンである。この2つのイメージによって外の人には小布施に引きつけられている。そして次に実際に小布施に来た者は、その街並みの景観と花文化に引き寄せられ、町を歩く。他の美術施設も見て回る。歩き疲れて、また様々な小布施の食文化に触れ、この過程の中で、小布施の店やガイドセンター、駅で、主として観光に従事する地元の人と交流することになる。小布施の各農家の活動をハイウェイオアシス小布施、第六次産業センター等を通して知ることになる人もいる。さらに小布施を堪能する者は、小布施で行われている各種のイベントに参加する。そのようなイベントで大きな役割を担っているのが、小布施堂のセーラ・マリ・カミング氏である。カミング氏はノースカロライナ州出身のアメリカ人女性であるが、学生時代長野オリンピックを契機に小布施を知り、卒業後榊一酒造に就職する。長野オリンピックでは、イギリス代表選手を小布施に連れてきて激励会を行ったり、北斎の国際シンポジウムをプロデュースしたり、また、外国人利き酒師一号となり、自らスクウェア・ワンという清酒を開発したり、「蔵部」というレストランを小布施にもたらしたり、小布施マラソン大会を仕掛けたり、毎月ゾロ目の日には「小布施セッション」という講演会を開いている。この講演会は、一流の学者、文化人を小布施堂の工場三階の屋根裏部屋の講演会場に招いて、様々なテーマで講演してもらうものである。興味深いのは、地方都市のプロデューサーが一流の文化人を選ぶ力を持っているということ、ここに聴衆としてやって来る人間は、地元の小布施の人間だけではなく、長野市市街地からも、そして全国からもやって来ること、講演会の後には、小布施堂のおいしい料理でもてなす立食パーティがあり、講演者と聴衆、あるいは地元の人と外の人が交流できることで、小布施を文化的により深く知ってもらう機会を設け、人々の知的な交流を進めていることである。この「小布施セッション」では、大学生は当日ボランティアとして会場の雑務を引き受ければ、無料で講演会を聴講でき、またパーティにも参加できることになっている。

市村次夫氏は、「小布施堂」兼「榊一酒造」の社長であり、本人も小布施のイベントの様々な仕掛け人である。

もう一人、交流の窓口になっているのが、小布施の第三セクター「ア・ラ・小布施」の事務局長の関悦子氏である。ガイドセンターの主人であり、観光客の細かな質問に答えると同時に、宿泊施設が少ない小布施でプチホテルである「ゲストハウス小布施」の支配人でもあり、訪問客をもてなす。また、「小布施国際音楽祭」等の地元イベントのプロデューサーでもある。関氏の持つネットワークが、様々な人々を結びつけている。

また、小布施へは様々な視察団も多く、公式訪問には、市村良三町長が気さくに小布施の顔として対応する。

栗菓子屋「竹林堂」は、11の直営店舗と二つの文化施設「日本明かりの博物館」、松代の「池田満寿夫美術館」を経営する。また、同じく栗菓子屋「櫻井甘精堂」は、直営店五店の

他、小布施に「栗の木美術館」と優れた日本庭園を持つ。和菓子店舗では、ともに栗強飯を出すレストランを併設している店舗も多い。このように小布施の地元中心産業である「栗菓子店」が、単なる和菓子屋に終わらずに、小布施の特産を名物にした「栗強飯レストラン」と「美術施設」または「講演イベント」に進出し、ホスピタリティ産業を展開させ、小布施で人々の交流に一役買っている。三社は競合関係にあるが、同時に三社あることによって、小布施の景観・交流の場・集客力が強くなり、三社は協力関係にあるともいえる。また、この老舗三社の本店の周りに、観光地小布施を彩る、いくつものミニギャラリー、飲食店が展開して、小布施の回遊性が増し、小布施のストーリーを作っている。小布施では、若者の小資本進出も盛んで、雑貨屋、木工屋、旅行代理店、印刷屋、ガラス細工屋等も生まれて、HPでの露出も増えている。小布施は小さい町だが、外部の人が求めれば、小布施の人々と直接知り合いになり交流できるインターフェイスがわかりやすい所に多く存在する町である。小布施にはまた、東京理科大学の「小布施まちづくり研究所」があり、小布施の家屋や景観の基本的なデータを建築学・都市設計の点から収集すると同時に、小布施の文化資産の再発見、都市計画への提言を行っている。町へ向けての学術的情報発信を行うと同時に、その調査研究は、他のまちづくりの参考にもなっている。

小布施は小さいながらも、多くの人間が情報発信をし、交流する場と仕掛けを持ち、様々な出会いやまちづくりのストーリーが生まれる町である。

一方、松代の外との交流はどうだろうか？ 松代の町おこしをリードしてきたのは常に商工会議所であった。その意味で、商工会議所の会頭や事務方の活躍によって、長野市の中枢と繋がりができ、さらには国土交通省の助成金等を得ることができ、松代の現代の街並み作りにつながっている。次に「エコールド松代」の事業は、多くの市民ボランティアを育て、松代の住民と外から来る訪問者が多く交流するきっかけとなった。また趣味の集まりである諸種の「エコールド松代倶楽部」は、地元の人が、訪問者を「もてなす」という文化を制度化したのではないだろうか。さらに、「NPO法人夢空間松代」は、その様々な町おこしイベントを通して、多くの住民に交流の機会を供し、外部の人間に学術的に松代の地域おこしを研究させるきっかけを与え、さらにその出版物を通して、視覚的に、またストーリーとしての松代をアピールすることに貢献している。地元の魅力を地元の視点から深くアピールする「研究書」「報告書」が地元から外に向かって発信されることは、息の長いまちづくりに貢献する。とくに「夢空間松代」の事務局長の香山篤美氏は、ご自身の経営する衣料品店「カヤマ」の一角を「夢空間」で制作した書籍の倉庫兼販売所、会への訪問者対応の場、「夢空間松代」の事務室として提供し、ご自身もNPOの様々なコーディネーションに携わっている。NPOの外に向けての顔であり、会の中の結節点である²⁴。

14 また、真田宝物館で収集されている真田氏に関連する研究・報告書の数々も、地元の歴史的アイデンティティを整理する資料、松代の歴史と日本の歴史をつなぐ資料として無視してはならない。そして真田宝物館を案内する「文化財ボランティアガイド」の方々の、地元への深い愛情と多角的な知識に基づいたガイディングの資質は、他にあまり類例を見ない。彼らは、プライドを持って自らを「観光ガイド」ではなく、「文化財ガイド」と呼ぶ。付け焼き刃的な知識を暗記するだけのガイドではなく、講習会・勉強会に出るばかりではなく、自らいろいろテーマで研究する熱心な方々である。ガイドの中には、英語ガイドの方もいる。現地の歴史文化の英語テキストが全くない状況からスタートし、現在、教養のある見事な英

語のガイディングをなさる。このような外国語ガイドが人口2万人規模の町にいることは、日本ではまだまだ驚きであり、町の国際化にとってきわめて貴重であろう。彼の話す英語ガイディングがテキストになると、松代の国際化はより進むだろう。ガイドさんたちは、松代にやって来た人たちが最初に訪れる真田邸や真田宝物館で、最初に接する地元の人々であり、この人々の対応や教養で、松代の第一印象が決まる。ユーモアを交えて、深い教養を披瀝するガイドさんたちには、多くの人が感動するのではないだろうか？

松代に多くの人々が目を向けるようになったきっかけは、現長野市長の鷺澤正一氏が市長に就任し、長野市観光を活性化させるために松代に目を付け、松代城修復事業と、エコールド松代事業に集中投資をしたからである。彼の政策がなければ、松代の年間訪問者数が30万人台から80万人台に跳ね上がることはなかった。そして、多くの人々の間の交流は生まれなかった。その意味で、交流の仕掛けを作った鷺沢氏の功績は地元では高く評価されている。

今後、人々の交流を加速させる仕掛けとはなんだろうか？「住民自治協議会」の施策かもしれないが、まだ、次なる一步は見えてこない。松代は、歴史文化遺産に関しては小布施に比べものにならないほど豊かだという。しかし、外部の人々との交流という点では、まだ仕掛け不足だとよく言われている。「エコールド松代」「真田10万石祭り」「松代ウォーク」等のイベントや、「真田邸」「真田宝物館」「文武学校」という歴史文化遺産が集積している地区や、「松代大本営」「松代城」「象山神社」「山寺常山邸」という若干中心街から離れた観光拠点はあるが、まだ、点で結ばれているに過ぎない。「旧横田邸」他、他の神社仏閣は、回遊するには、ぱっとしない。今後、賑わいのある交流をさらに展開するためには、1. 現在の街並み修景事業を続けていくこと、とくにモデルとなる回遊ルートをはっきりさせ、ルート上の修景を優先的に進めること 2. 人が集う飲食の場を回遊ルートにいくつか作ること、3. 松代城近くの公営駐車場の合理的利用を考えることが求められる。松代では、この駐車場に車を止めてパーク&ウォークを進める計画があるようだが、駐車場の近くに、周りの景観を壊すことなく、郷土色豊かなレストランを作ると、松代の中心街に自動車を誘導することなく、長野インターで高速を降りる車や国道沿いの車の注意を松代に引きつけることができ、訪問者の松代での滞在時間が長くなると考えられる。また、今までの松代の地域おこしの流れから、松代がさらに進むべき道を想像すると、松代のもう一つの遺産である里山の風景を活用することである。松代周囲の山は、人里から近いにもかかわらず、人工物が非常に少ない。また山の斜面には道路などの線が入っていない。昔ながらの「昔話」の中に出てくるような山並みを維持している。山裾まで、森が降りてきている。すなわち斜面林が美しい町である。植生は、在来種中心である。そしてこの山並みを借景にこの地方独自の建築様式をもつ古刹が山の麓に点在している。寺の前面には豊かな田んぼが広がっている「懐かしい風景」がある。松代は木造建築物と土塀、漆喰壁が多い、懐かしい匂いのする町である。残念ながら、電線は多いが、これを地中化すると、時代劇にも使える、江戸時代の町を作ることとも可能であろう。道路の一部は「三和土さんわど」にすることによって、昔の道を再現するのも良いだろう。家のファサードは伝統的な建築技法・意匠をできる限り守るが、内装は現代的な快適なものにしてかまわない。武家屋敷にこだわり、景観にこだわる人々が多い町である。これらの指針で面的な発展をしていくのはどうだろうか？他にまねのできない、際だった景観を創造できる可能性が松代には存在する。そして、これらが、松代の交流のメディアになっていくのではないだろうか？

- 1 この研究は、平成18年度淑徳大学学術助成金に基づく研究「長野県北部の「第六次産業」・環境・景観修景・観光化」・中山間村の福祉の効率を通しての内発的発展の可能性と問題点—長野県長野市松代・小布施町・栄町の比較事例研究」の成果の一部である。
- 2 鶴見和子「内発的発展論に向けて」鶴見和子／川田侃編『内発的発展論』東大出版会1989、鶴見和子「国際関係と近代化」武者小路公秀・蟬山道雄編『国際学』東京大学出版会 1976、鶴見はこの本で初めて「土着的発展」という概念で、内発的発展論を紹介した。
- 3 岩村沢也「内発的発展論の視座 鶴見和子の議論を中心に」『国際経営・文化研究』Vol.1 No.1 1997年 pp.23～40
No.1 平成9年3月
- 4 『小布施町史 現代編』2004年 p.137
- 5 この他に、ハイウェイオアシス小布施で自家用車を止め、そこから1時間に一本、小布施の街中を周遊するバスに乗って町を巡るシステムもあるが、あまり定着していない。
- 6 『庭園都市松代』NPO法人夢空間松代のまちと心を育てる会、2004
- 7 昔の家の前を流れる水路はドブで、家からの雑排水も流していただろう。しかし、現在は、下水は完備されており、「カワ」「泉水路」「セギ」には流していない。最近では、地表に出てくる浅層地下水の水源が涸れている所も始めている。水道用水の汲み上げが増え、浅層地下水がさらに深部に落ち込んだためか、アスファルトで覆う道や市街地化で雨水の地下浸透が減ったためか、あるいは松代地震により地下水脈の流れが変わったためか、原因はよくわからない。
- 8 米林由美子・佐々木邦博「長野県松代町における伝統環境保存区域の水路網の現状と保存」信州大学農学部紀要 第39巻1.2号 2003 pp.51-64
- 9 株式会社文化事業部編『町並み修景事業の記録』文化事業部2006 及び掲掲『小布施町史 現代編』pp.186-187
- 10 清野由美『セーラが町にやってきた』プレジデント社2002
- 11 真田氏は関ヶ原の戦いにあつては、兄信之が徳川方に、弟幸村が豊臣方に付、どちらか一方が生き延び、家系が続くように図った。なお、真田幸村の家来猿飛佐助、霧隠れ才蔵等は、後世作られた小説に出てくる空想上の人物たちである。
- 12 『松代／歴史と文化』信濃毎日新聞社 2000年 p.13
- 13 『信州松代夢空間めぐり』NPO法人 夢空間 松代の町と心を育てる会 2004 pp.28-29
- 14 幕末の儒学者、科学者、兵学者。藩主幸貫に「海防八策」を献上。藩主のアドバイザー的存在。大砲の鑄造に成功。ガラスの製造や地震予知器の開発を行い、更には牛痘種の導入も企図していた。彼の弟子に、吉田松陰、小林虎三郎や勝海舟、河井継之助、坂本龍馬、橋本左内、加藤弘之など、後の日本を担う人物が多数いた。妻の順は、勝海舟の妹。吉田松陰の密出国事件に連座し、幕府から松代に蟄居を命じられる。一橋慶喜に招かれて入洛し、慶喜に公武合体論と開国論を説いた。京都で尊王攘夷派から「西洋かぶれ」とみなされて暗殺される。なお、松代では「ぞうざん」と発音される。
- 15 1997年（平成9年）より、小布施では「あかり」によるまちづくりにも力を入れ、「あかりづくりマニュアル」が同年策定されている。
- 16 ただし、家の者に声を掛けたり、トイレを拝借したり、喫煙したりしてはいけないというルールになっている。「オープンガーデン」は、小さな街の区画をゆっくりと回遊する仕掛けになっており、観光客は街中を単に通り過ぎて風景を楽しむのではなく、各家々を訪れて、「立ち止まり」ながらその庭園を楽しむことになる。

17 小布施の環境デザイン協力基準

(1) 建築物を建築するときの事項

- ア 建物の外観と色は、周囲の景観に合わせる。特に屋根の形状は、気候、風土面から陸屋根を避けるものとする。
- イ 道路と接する敷地部分は極力緑化し、道を利用する人にもうのおいのある景観とする。
- ウ 道路沿いの塀は生け垣などで緑化する
- エ 車庫、物置など外から見えるものは位置と色を工夫する。

(2) 美しい町並みを作るための事項

- ア 広告物は色彩や大きさ等に配慮する。
- イ 大規模な建築や工作物を造るときは、配置や形態に配慮する。
- ウ 建物の道路面にはゆとりの空間を配慮する。
- エ 駐車場の出入り口は歩行者に配慮する。

(3) 花のある美しいふるさとの景観を育てるための事項

- ア 家庭、職場及び公共の用途に花や緑を増やし、うるおいのある空間を広げる。
- イ 空き地及び道路沿いに花木を植え、美しいふるさとの景観を育てる。

前掲『小布施町史』p.189

18 前掲『小布施町史』pp.191-194

19 長野市HP「伝統環境保全事業 城下町松代」

http://www.city.nagano.nagano.jp/upload/1/bunka_denkan_denkan_matsushiro.pdf 2008年9月14日現在
松代全体で年間 1,800万円の予算、一件に付上限300万円で、費用の2/3まで補助。長野市の景観審議会で審査される。

20 平成15年度で、131人。近隣の須坂市169人、高村山64人、豊野町50人（平成14年度）とされるが、平成18年には99人に減っている。

21 小布施の第六次産業センターでの聞き取りによる。

22 「夢空間松代」については2回にわたる香山篤美氏への聞き取りと「夢空間松代」のHPの情報による。

<http://www.geocities.jp/yumekuukanmatusiro/> 2008年9月15日現在。

23 松代商工会議所は2006年10月にその歴史的役割を終え、長野市商工会議所松代支部となった。

24 松代でも小布施と同じように大学と地域の共同があるが、小布施が小布施市役所と東京理科大学との行学連携であったのに対し、松代では、「夢空間松代」と神奈川大学西和夫研究室が協定を結ぶ民学連携である。この連携は2007年にスタートした。

(受理 平成20年9月25日)

善光寺平の地形図 右上に小布施obuse 中央下に松代matsushiro



善光寺平の地図 右上に小布施、中央下に松代



* 共に google マップの地図と地形図を使用。

小布施の風景



栗材を使った「栗の小径」



小布施堂前 広場



蔵を改造した食事処「蔵部」



竹風堂 小布施の建物の殆どが切妻屋根



ゲストハウス小布施の小径



小布施の栗

松代の風景



屋敷の前を流れる「カワ」



修景された武家屋敷の武家門



再建された松代城入り口



真田藩文武学校



花盛りの古刹



山裾が開発されてない風景は貴重